

句集

夏

目野草城

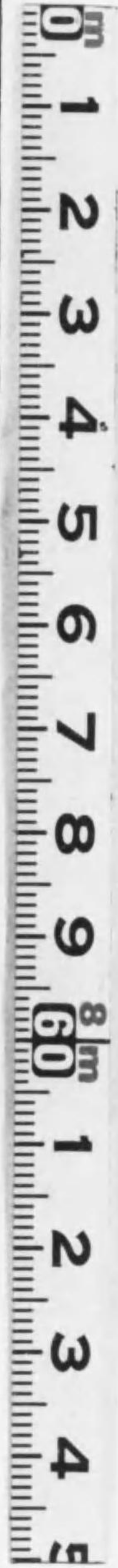
911.368-H61ウ



1200500756278

911.368
H61

白井書房



始



911.368

H 61



日野草城



白井書房

句集
夏

日野草城



日野草城



日野草城

句集 夏

日野草城



私の處女句集である「草城句集(花氷)」の夏の部を抄してこの小冊を編んだ。一昨昭和二十一年冬上梓した「句集春」に続くものである。

「花氷」は昭和二年の上木で、私が俳句を始めてから二十七歳に至る十年間の作品集である。二十年前の私の青春のうたが今日の若い俳句作家によつてどのやうな評價を得るか、少くとも私にとつては興味のあることである。

抄編に際して若干の句に修正を施した。

昭和二十三年大寒

日野草城

夏の夜や灯影しの暮る廂裏

短夜や男の湯大にぬる女の子

ふところをのぞける乳や明け易き



明け易き夜の夢に見しものを羞づ

短夜や袴をたたむひとりもの

産院

みごもれるをみなをみなや明け易き

夕風に涼しくたわむほづかな

朝の海涼しく窓に湛へたゆ

抜衣紋髻にさはらぬ涼しさよ

後浪を風控へて聳る岩へ涼も

晩涼や朶雲明るゆく土比叡憂鬱

夕涼の清き韻ふるし舞新
晩涼や奏樂を待つ人樹下に

岡山後樂園詩の人世下

夕影の青芝踏みて鶴涼し

あちらからに雪掃くやく土用の舌疊

三伏の小屋を塗りつゝ白べき

婦人會幹事やさしき鼻に汗

盡炷の餘香ほのかに夜の秋

サイダのうすきかをり夜夜の秋

夜の秋の蚊帳つる湯女に言はぬ戀

一目惚やがて忘るる夜の秋

人それぞれ吉凶ありて家の夏

薫風の薨けをつらね烏丸

薫風の素足かきがやく樂女かな

白南風や化粧にもれむ耳の蔭

青嵐の到ると見ゆる遠樹かな

さみだれやささ口メ疲れある樂屋風呂

桐の葉にさみだれ_ま濺ぐひもすがら

霖_{ながあめ}や濡れ眞に白ぞ濡るる庭の芝

孤り病む

梅雨を見て句を案ずる粥の煮ゆるま

景福宮慶會樓

紅蓮に管絃ひびく早かな

圍ひものけふは櫛卷夏の雨

景語宮製會集

う雨ちひらひく傘の匂や夏の雨

雨の跡

夏の雨の眞白に降る杉林

わだつみのゆふばえとほき夕立かな

夕立の到りさざめく瞬の内

匂はせて魚煮る小家夕立ばれ

驟雨來て動く匂ごころ避暑に倦む

山谷の忽ちひびく雷雨かな

年甲斐もなき雷怖ぢや立古男

雷神迥がなり風伯先づ到る

嚴島

はたた神七浦かけて響みけり

朝鮮金剛

一萬の峰を駈けるやはたた神

目盛の土に寂しやおのが影

たのもしく松風立つや日の盛

日盛や駛る電車を搏つ樹影

日盛の壁を眺めて無聊なる

松の葉のしんかんとして日の盛

壁土を捏ねるにほひや日の盛

起きぬけの肌の曇りや夏の露

露涼し湯女と来て湯女裾からげ

露涼し裏戸竹割る音のして

わざもこや虹を見る眉あきらかに

夏の月樹下に石上に人語かな

颱風や鳴き寄る猫もなつかしき

大灣の吞吐の船や土用浪

大瀧や小瀧や暮れてひびきあふ

瀧の音を聴きもりて夜の茂かな

そよ風やしきりに湧ける夕泉

かがまりて水皺したしき泉かな

仁丹を清水の中へこぼしけり

夏瘦や所詮叶はぬ戀もして

面影も失するばかりに夏やつれ

山賤やまがっの夏を瘦せたるあぎとかな

夏瘦も知らぬ女をたぐみけり

相逢うて夏瘦の手を握り合ふ

汝なが瞳あはれに明し夏やつれ

煩惱のこころ疲れて晝寝かな

晝寝して枕の毛赤き女かな

毛ろじるとうなじをのぐて晝寝かな

現し世はかなのしぐ覺めし晝寝かな

なましひのほとほとむむし晝寝め

夕風もやの晝寝さめたる犬と猫

晝寢どち覺めたるはこゝろや青すだれ

起し繪や老いし妾の子煩惱

晴れし夜の紅提灯や涼み舟

涼む娘にぞつこん惚れてしまひけり

七人の女に戀はれ音頭取

祭の灯つきたる島や波の上

梶の葉やあはれに若き後の妻

星祭おのが色香を惜みけり

燈籠に寄りて明るき目鼻かな

高音吹いて麥笛青し美少年

畫顔まに石いし灰はいかかる赤痢かな

歸省して母の白髪を抜きにけり

くろくろと汗に溺るるほくろかな

汗の妻化粧くづれも親しけれ

おしろいののらぬあせもとなりけり

天瓜粉打てばほのかに匂ひけり

心得てめをつむりけり天瓜粉

天瓜粉ところきはす打たれけり

晩年の子。を鍾愛す。天瓜粉

稗蒔の嵐。及びべり洗天ひ瓜髪

くれなるをみどりを籠めて花氷

風鈴の遠音。きこゆる。涼しきよ

月の隈風鈴あり。鳴り出づる

人知れず暮るる。軒端の釣葱

依^い稀^きとして暮^くる^る比^ひ叡^いと釣^つ葱^{そう}

衣^え紋^{もん}竹^{たけ}のシヤツ風^{ふう}簷^{えん}に廻^まる^る廻^まる^る

何^{なに}も^もな^なき^き袂^{たもと}吹^ふか^かる^る扇^{あふぎ}風^{ふう}機^き

扇^{あふぎ}風^{ふう}機^き舞^まひとどまりて無^な表^{ひょう}情^{じやう}

雨^{あめ}だ^だれ^れや葭^{あし}戸^との中^{なか}の灯^{あかり}しづか

淺^あ酌^{しやく}の微^こ醺^い葭^{あし}戸^との外^{そと}は川^{がは}

青簾片はづれしして夕どころ

雨を見る白き面輪や青すだれ

青すだれ解き放ちたる音涼し

棕櫚の葉を打つ雨粗したかむしろ簾

愁ひつつ坐る花莫塵はなやかた

簾椅子の清閑を得し天句や

籐椅子に浅くかけたる夫人かな

石段の水を打たれど高々と

憎えぬる撫子に水太く打つ

板塀の應ふ音佳し水を打つ

將相のつらだましひや菖蒲太刀

菖蒲湯を出てかんばしき女かな

行水や籬まがきあやなくなりにつつ

行水の女に灯す簾越し

行水のひと髣髴と起ちにけり

行水の涼しき乳を見られけり

行水の大女房や灸のあと

肌ぬぎやうらはづかしき乳二つ

こそばゆく砂に下り立つはたし 跣かな

夕潮に泳ぐすはだか 蚕の妻

白團扇一つ西日に置き曝し

愚かなる女媚び寄る團扇かな

陣襦袢たたみ秘めたる扇かな

白の扇や乾き乾きか言ひ墨の痕

いろはるに扇子弄れど言ひにくし

初蚊帳のしみじみ青き逢瀬かな

青蚊帳の縹渺として寝亂るる

覺めきらぬ頬ほに風の蚊帳さなるなり

くつろげし胸もと白し蚊遣香

眠たうてあごのまどかに蚊火の妻

神仙を夢みて覺めぬ蚊遣香

たましひのさびしくいぶる蚊遣かな

埒もなや蚊遣の妻のち大あくび

憂き世ともたのしき世とも衣更

内縁の妻の誠や白衣更

源氏名は何とかいひしころもがへ

三子みな男で譲るひとへもの

人酔うて浴衣いよいよ白妙に

貸浴衣みな男もの妻も着る

甚平やすこしお凸で愛らしき

潮風に吹かれたかぶり夏羽織

夏羽織皺みぐるしく旅終る

嵩もなう解かれて涼し一重帯

帯どめの翡翠の青き一重帯

通り雨に逢うて戻りし一重帯

うまず女のきりりと締めし一重帯

白服や循吏折目を正しうす

ところてん煙のごとく沈みをり

帷子かたの腋背びら涼しところてん

瓜もみや相透く縁へのうすみどり

瓜もみの酢の利き過ぎし月夜かな

うすまりし醤油すずしく冷奴

古妻のほろりと酔ひぬ冷奴

移り香の衿になほあり胡瓜漬

鮓の香のほのかに寒し晝の閑

千早ぶる神代の石や鮓の石

鮓いまだ馴れず鮓の匂既に成る

馴鮓の飯いの白妙くらいひけり

新玉露とろりと舌いに載いりにけり

冷えわたる五臓六腑いや氷水

サイダーや繁しげに泡だつ薄みどり

冷酒ひやぶに澄すみむ二三さん字じや猪ぶ口の底

冷酒ひやぶの利きいていよいよ舌足らず

糟糠そうこうの妻つまにすすむる冷し酒

老ろう鶯あう啼ないて山やま行ゆきの餘あま情なさけかな

かはせみや水みづつきかからふくらばき

青蛙ちまちまとるる三五匹

いとしさに堪へねば捉ふ枝蛙

枝蛙青く跳びけり砂の上

もの戀へば氣もそぞろ墓踏んづけし

瓜番が雷死の葬はふり青とかけ

濡れきりし幹にででむし居るわ居るわ

くらげ流る流る曳舟の綱きりり

沈璧の浮み出でたる水母かな

松明の長きけむりやほととぎす

月しろのにはかに明しほととぎす

ほがらかに月夜更けけりほととぎす

苑日々に草深うなる鹿の子かな

明け易き鉢に飼はるる金魚かな

金魚飼ふ母に童幼心ありぬ

熱の瞳に金魚の紅も不興かな

夜の金魚しづかに遊ぶまくれなゐ

かはほりやさらしじゆばんのはだざはり

かはほりか夜の魔か飛べる軒端かな

日ざかりの松しづかなり夏の蝶

小むかでを搏つたる朱の枕かな

げちげちや風雨の夜の白襖

筐底の暗きに沈む紙魚の銀

曝書變蠹魚亂帙の嶮に據る

松風に誘はれて鳴く蟬一つ

蟬遠し午下の倦怠茶を淹れよ

蟬鳴いて名残雨ふる木立かな

飛ぶときの蟬の薄翅日照雨

鳴き添うて高音張る蟬雨霽るる

ほのかなり芦の末葉の子かまきり

隠り沼にひそみて飛ばぬ螢かな

瀬がしらに觸れむとしたる螢かな

大沼の夜の光やほたる狩

たかむらをつひに出でざる螢かな

湯あがりのひとの機嫌や灯取虫

夕飯やすでに來てゐる灯取虫

博覽のひろき額や灯取虫

耽讀の眉を掠むる灯取虫

見てゐるや眠られぬ夜の灯取虫

終列車送りし驛の灯取虫

火蛾舞へり選句疲れにしばし在る

灯虫佗ぶ父に贈らむ虚子句集

蠅一つ夜深き薔薇に逡巡す

寝ねがてにしてをれば蠅にとまらるる

晝深し 懶もろき 蠅の 花移り

添ま乳ち寝ねの 忘れ 乳房に 蠅とまる

涼しうて蚊にくはれたる乳房かな

田中王城天龍寺畔に別墅を持つ

王城さん 嵯峨の 藪蚊は 大きかる

夕澄みて 東山あり 蚊柱に

蚊柱に夕空水のごときかな

蚊を打つてびしりとひびく人の肌

わが臍を襲ひし蚤を誅しけり

山蟻に這はるる足のうつくしき

曇り日の青苔を這ふ毛虫かな

焼かむとす毛虫のまなこ見据ゑけり

まひまひの面白うなる無聊かな

日和水風いでまひまひ癩かん性しよ持もち

まひまひやきのふの沼の情死人

そよ風に日かげさざめく夏木かな

大風にはげしくにほふ新樹かな

星屑や鬱然として夜の新樹

日かげりて風色澄める新樹かな

湧きあがり膨れあがりて新樹かな

みづうみの汀の新樹そびえけり

拂曉の風のはげしき新樹かな

雨意やがてひそと降りいでし新樹かな

新緑や曉色到る雨の中

新緑に松はかぐろき東山

銀閣は古びつくしぬ新緑に

わくらばやぶらぶらやまひいつまでも

わくらばや淫祠なりとて毀たるる

古竹参差たりその中の今年竹

五十嵐播水京大卒業醫學士となる

朝風や藪の中なる今年竹

ゆふばえにこぼるる花やさるすべり

葉さき早や燃えて微風の若楓

夏草に碎けて赤き煉瓦かな

夏草や心中者の下駄二足

しこぐさの茂りつくして刈られけり

女房の立小便や麥の秋

しみじみと青稻暮るる身のまはり

月明し廢墟このあたり麻茂る

青沼のとばかり戻る花藻かな

ぼうたんや眠たき妻の横坐り

白猫の眠りこけたる牡丹かな

船中

玄海のうしほのひびく牡丹かな

芍薬に頭痛はげしき女かな

中

芍薬を剪るしろがねの鉄かな

ひなげしや妻ともつかで美しき

ゆあみしてほのかにねむし薔薇匂ふ

廢園のあけぼのひらく薔薇の花

黒き蝶来て白薔薇を白うしぬ

露臺風ありやさうびに宵の月ありや

白日や少女提げたる薔薇の紅

たわやめのさうびを摧く暎かな

清閑や香のそぞろなる百合の花

句座更けてややにみだれぬ百合にほふ

須彌壇の夜陰を薫ず供華の百合

百合皓し夜の魔障をうち拂ひ

白百合を畏れて飛べる蠅の群

百合買うて朝の花屋を立ち出づる

白百合は黒衣とまゝ夜の蠅

紅はちまの露を拂うてみらさげり

炎にはちま日だけし水になやましき

流れ矢の蓮田は落ちし暮色かな

ひとくきの白あやめなりいさぎよき

ひともとの葵はな咲き葵の匂

朝顔にすずしくあたる朝日かな

朝顔は世話女房の風雅かな

朝顔は世話女房の風雅かな

朝顔をながめ酔るや宿酔

宿酔

空よりも碧き朝顔咲きにけり

さる方へ林檎を贈りて

思ひごと青き林檎にうちあけよ

母病む

切望のバナナ二つで足る寂し

夏みかんぐいとむかれて匂ひ立つ

夏みかんざくりざくりとむかれけり

夏みかん骸となりて匂ひけり

水蜜桃むく手つき見る見るとなく

兩斷の西瓜たほるる東西に

舌に載せてさくらんぼうを愛しけり

聖くるる眞夜のふたりやさくらんぼ

逢へぬ夜のさくらんぼうを踏みつぶす

刊 房 書 井 白

岩田潔俳句評論集

俳句 靜思
俳句 浪漫

價 八〇圓

價 八〇圓

送各十圓



現代俳句叢書

(定價各冊二十五圓 送費十圓)

石田波郷句集

風切

長谷川素逝句集

定本句集

岩田 潔句集

女郎花

加藤楸邨句集

未定

橋本多佳子句集

信濃

池内友次郎句集

調布まで

松本たかし句集

未定

岩田潔編輯

現代俳句、新流の

秀作集、明日への

俳句作家の珠玉作

品をあつむ

終

定價八十円